

O3-001

幼児への性教育「いのちのおはなし会」への参加が母親に及ぼす影響

若林 沙来¹、井上裕美子²、鈴木 朋子³、佐々木裕子³¹田園調布学園 中部・高等部²昭和大学横浜市北部病院³杏林大学保健学部

【目的】

大学における地域貢献活動の一環として、幼児を対象とした性教育「いのちのおはなし会」(以下、おはなし会)を実施し、参加した母親へのおはなし会の影響を検討することを目的とした。

【方法】

おはなし会は、幼児期の子ども達に命の大切さとプライベートゾーンを守ることを伝えることをねらいとした、ボランティア学生4名によるシアター形式の約25分の寸劇である。A保育園のおはなし会に参加した幼児の母親6名を対象に、フォーカスグループインタビューを実施した。インタビュー内容は、おはなし会を通して妊娠・出産を振り返って生じた思い、子どもへの思いの変化等である。分析は、ICレコーダーの録音を基に逐語録を作成し、内容分析の手法に基づいてコード化し、意味の類似性と異質性を比較しながらカテゴリー化した。なお、本研究は、杏林大学保健学部倫理審査委員会の承認を得て実施した(承認番号No.2019-17)。

【結果】

参加者は4歳児クラスの子どもの保護者であり、おはなし会への参加は初めてが5名、2回目1名であった。おはなし会への参加動機は、子どもと同じ話を同じタイミングで聞くことで話の共有ができるなど、幼児への性教育に関心を持つものがほとんどであった。分析の結果、おはなし会を通して母親が自身の妊娠・出産を振り返って生じた思いとして【命の誕生の奇跡を実感する】【妊娠・出産当時の感動が蘇る】【命の誕生の原点に立ち返る】といった3つのカテゴリー、9サブカテゴリーが抽出された。また、おはなし会を通して生じた子どもへの思いの変化として【育児の初心に戻る】【子どもにかけがえのない存在であると伝えたい】の2カテゴリー、7サブカテゴリーが抽出された。

【考察】

おはなし会に参加した母親は、妊娠出産の感動や命の誕生の奇跡に改めて気づき、その体験を経て今があることへの感謝の気持ちなど、自身の妊娠出産体験に対して肯定的な発言が多数語られた。また、おはなし会は母親が出産や育児の原点に立ち返って自分自身を見つめなおす機会となり、自分にとって子どもがいかに大切な存在かを母親が再認識する場となっていた。以上のことから、育児期の母親がおはなし会に参加することは、妊娠出産の体験に新たな意味づけを行い、母親としてのアイデンティティの積み上げにプラスの効果があると考えられた。

O3-002

医療的ケア児等コーディネーターが実施しているソーシャルワークの要因分析

田中 真衣

白梅学園大学

【背景・目的】

医療的ケアが必要な子どもが増えてきているなかで、地域における医療・保健・福祉・教育等の分野横断型の協働体制を構築する必要性が高まってきている。多機関協働は、社会課題解決型アプローチとして設定される機会が増えてきているが、協働を基盤とした地域づくりに関する要因分析の究明は滞っている。そこで本研究では、協働体制構築の要となる医療的ケア児等コーディネーターの役割に注目し、その業務内容や役割等の現状を明らかにすることを目的とする。

【方法】

・対象者：医療的ケア児等コーディネーター10名

・調査期間：2022年2月から2022年6月

・調査方法：各60~90分の半構造化インタビューを行った。インタビューは承諾をもとに録音・録画し、逐語録を作成をした。それをもとに修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ(M-GTA)を用いて分析した。分析テーマと分析焦点者に着目し、分析ワークシートを作成し、概念名をつけていった。子ども学を専門とする大学教員・研究者のスーパーバイズを受けながら行った。

・調査内容：インタビューガイドに沿って下記5点の項目を設定し、聞き取った。①医療的ケア児等コーディネーターの勤務内容、②ケアマネジメントにおいて大切にしていること、③地域における資源開拓の方法、④医療的ケア児支援システムの動きやすさと課題、⑤コーディネーターの役割を果たすための必要なサポート

・倫理的配慮：研究対象者には、研究の趣旨を説明し、自由意志の参加、個人情報取り扱いについて口頭及び書面で説明し、研究協力の同意を得た。なお、白梅学園大学・白梅学園短期大学「人を対象とする研究」に関する研究倫理審査委員会の承認(承認番号：202116)を得て調査を実施している。

【結果と考察】

生成された概念とカテゴリーから、全体の構造を明らかにする結果図が作成された。＜いっしょに考える＞、＜新たな学びがあり楽しい＞という要素が多職種連携の要になっていた。また、保護者や関係者との信頼関係の作り方や資源開拓の方法の共通項も整理することができた。また、医療的ケア児等コーディネーター同士の交流やスーパーバイザーのバックアップ機能の役割の大きさが明らかとなった。

*本研究は日本学術振興会科学研究費助成事業(若手研究)の交付を受け取り組んだ成果の一部である。